
式神王 ~ 百目の瞳 ~

かつよし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

式神王　　～百目の瞳～

【Nコード】

N7348H

【作者名】

かつよし

【あらすじ】

辺境の村。ここは因縁の地。なぜ戻れたのか？自分の過去はいつたいどこに？妖怪百目との戦いは必然。そして、自分の内に存在する力とは・・・ダークロードに迷いし者の運命とは・・・

「妖」の序

「妖」の序

ここは。四方を山に囲まれた辺境の田園地帯。

落日の黄昏が、陰と陽の太極に染まり、やがてそのバランスも、あつという間に夜の帳に幕引きされる。

そして、この一帯を完全な闇で覆い尽くし、軒を連ねる民家からの明りが、ここ唯一の明りになる。

草木も眠る丑三つ時、静寂の暴走は、耳鳴りとなり襲い来る。だが、鼓動のような虫の声^ねが、静寂の耳鳴りと共鳴し、更なる眠りの深奥へ誘^{いざな}う。

そんな中、ザッザッ・ザッザッ！何かが擦り歩くような音が民家へ近づき、軒下に何やら霧のような影が湧き出してきた。

それが、吸い込まれるように戸板の隙間へ消へ、暫くして、戦^{そよ}ぐように抜けて行った。

「ぎゃあー！」突然の悲鳴。

メリメリ・・バァーン！戸板を破り、住人が転がり出てきた。

「うわあー・・たっ、助けてくれー」のたうち回る住人。

「なんじゃ・・どうしたんじゃ」悲鳴を聞きつけ、急ぎ飛び出してくる近所の者たち。

「目がゝ目がゝ・・」両目を掻き^{むし}耖る手が退いた時、そこには・・ポツカリと二つの空洞が空いていた。

「なんじゃ、どうしたんじゃ？」

「見てみい・・目がなくなつとるぞ」

恐怖に声を失う者や喚き散らす者、村はパニック状態に陥ってしまった。中、暗闇に浮かぶ怪しい影が、じつとその様子を窺^{うかが}っている。

た。

薄らと浮かび上がる小さな光が一つ・二つ・三つ・さらに増え続けてくる。

それはまさに目玉・幾つもの瞬まはたきを繰り返す眼差し・そしてそれは、闇のなかに消えていった。

「帰」の序

「帰」の序

ジリジリと照りつける陽光。蝉の声が重なり合い、鼓膜を通し響く音は、物質的質量を伴ったように沁み入ってくる。

木陰を選びながら山道を下る者が一人。この日差し、熱かろうに・黒の布切れを頭から冠^{かぶ}り、ふらふらと覚束^{おぼつか}ない足取りは、生者とは思えない。

暫^{ひまじ}くして山を抜けると、緑濃い田畑が視界に飛び込んできた。そして、目の前に、透明な水のせせらぎがあった。

勢いよくその水に顔を浸け、ゴクリゴクリ！と喉を潤す。

バシャッ！突然、何かが水面^{みなも}に跳ねたような？顔を上げ見ると、水中に藻らしき物がゆらゆらと靡^{なび}いていた。

それがゆつくりと、水中より浮き上がり、頭の上に皿を乗つけ緑色の顔が、こちらを睨^{にら}みつけていた。

「なんだ？お前は・・・」浮き出たものに問いかける。

「お前・・・よく戻れたな」皿を乗せた緑の者がしゃべった。

「戻った？・・・なんのことだ」

「知るかー、ばーか」言い放つなり水中に没し、どこかへ泳ぎ消えた。

・・・「戻った？なぜ俺はここに来た？俺は・・・何者なんだ・・・」水面をじつと見つめていると、ガサッ！・・・草むらに何かがいる。そこには童^{わらし}がこちらを見ていた。

「おい！おまえ・・・」呼びかけると、童は草むらに潜り、もの凄^{すごい}い速さで走って消えた。

「なんなんだ？」訳もわからず、辺りの気配を探るも、何も感じずその場を後にした。

田畑の畦道あぜみちを渡り村に入ると、なにやら異様な風景を目にした。
村人の何とも活気の無さ・・ただ、ボーツと座り込む者や、田んぼの同じ場所に鍬くわを振り下ろすだけの者・・何かに取り憑かれたような者ばかりだ。

目の前に、夢遊病者のように歩く村人がいる。その肩を掴み、こちらを向かせた。

！？「おっ・・おい！」村人の眼がスッポリと無くなっていた。

”どうなってるんだ？”周りをを見渡し、目につく村人ひとりひとり見て回る。

皆・・眼がなくなっていた。

陽光は依然、真上から照らされ、吹き抜ける風に、土埃が舞い上がり、死者の村と化したようなこの地を見渡す。

「ここは・・この村は・・」記憶の断片が少しだけ活性化するのを感じたが、まだ己自身に感じる違和感と、まだ晴れぬ、闇を彷徨さまよう記憶。

ただ、ここは確かに記憶がある。

「帰ってきた・・帰ってこれた・・でも、何の為に？」

「覚」の理

「覚」の理こゝろづ

天地が荒れ狂う時代。世は乱世となり、屍の山にさらに屍の山。死臭渦巻き、血肉が散らばる戦場の跡。

夢破れし者どもを、啄つばむ鳥を追ひ払い、肉を食らいし者たちは、魂こゝろをすてた餓鬼となる。

この世に未練を持つ者は、欲深き者に取り憑いて、人を殺める鬼となる。

繰り返される殺生は、更なる鬼を野に放ち、百鬼集いて闇に発つ。

人の心はなんて弱いものよ。泰平の世を望みながら、一方で欲を満たそうとする。

そんな心を、鬼は見逃すはずもない。人の本能を少しだけ誘惑すると、後は勝手に本能を剥き出しにする。

鬼が取り憑き、そしてやらせるのではなく、勝手に人が事を起こす。

鬼自体、ただの切っ掛けに過ぎないのであろうか。

この世の鬼を退治すれど、人の心の奥底に棲む鬼が消えぬ限り、更なる鬼は現れる。

しかし、蔓延はる鬼を、捨て置く訳にはゆくまい。

穏やかなる現世を築くため、地火風水・あらゆる式神を世に放つ。

さて、鬼退治でござる。

ある時、この世とあの世の間に迷い込んだ者が一人。

漂い続けるその者は、己の思念と霊力に守られ、生きるでもなく、

死ぬでもない。

私もこの異世界に長く留まり、同じような者を見たことがある。
人の魂たまは、陰の力に左右されやすく、闇に吞まれた者たちは、いつ
しか本当の鬼になる。

ただ、この者を守護する力は、優しさに満ち溢れている。

ならば、助けよう・・「臨・兵・闘・者・皆・陣・裂・在・前」・
・？

” はて？こやつ・・すでに鬼の力を持つておる。この世に落ちる
前、鬼の僅かな力が入りこんだものか”

「ならば、その力・・己の思うがまま存分に使い給へ！」
たま

突然、霧が立ち込めてきた。

ギギイ・・ギギイ・・どこからともなく一台の牛車が現れた。だが
その牛車には、引く牛がない。勝手に動いてくる。

さらに、その横に身の丈7尺（約2mちよつと）ほどの大男が立
つていた。

「よろしのですか、このような者を世に放して・・」大男が問う。

「心配するでない、お前も嘗てこの者と同様に、この世で彷徨つて
いたではないか」

「確かに・・ただ、こやつは人・・況してや鬼の力を宿すものなれ
ば、いつしか鬼になりましょう」

「ふむ、それもまた一向・・ささあ、早く車へお乗せ」

「何をお考えか・・晴明殿」

そして、一行は霧の中に消えていった。

「憶」の苦

「憶」の苦

虚空に舞う風がうなり、太陽が沈み始める山の頂からの何とも切なき陽光。

少し小高い丘の上。ちょっと安定の悪い石に座り、村を見下ろす。記憶というものは、なんとも苛立たせるものだろう。

思い出せそうで思い出せない。考えれば考えるほど記憶の闇が大きくなる。

いったい何が起こったのだろう？この村に来る前、俺はどこにいたのだろう？

そしてあれは何だったんだ・・・何かに揺られていたような？・・・誰かが覗き込んでいたような？目覚めた時には、深い森の中にいた。そして、訳もわからず歩いていると、この村に着いた。

なぜだ、なにがどうなっているんだ、疑問符が増えるばかり???

足元の石を拾い、手のひらで玩^{もてあそ}んでみる。

「覚えている・・・あの森・・・」視線の先、田畑の向こうに広がる森が見える。黒い塊のような森。今にも村を飲み込んでしまいそうな森。光すら拒むような森。

「あの森に・・・」一瞬、石を弄んでいた手が止まった。

その石を茂みに思いつきり投げた。

ガッ! 「キイッ!」・・・バタッ!

石を投げた者はすでに空中に舞っていた。

人間離れた跳躍は、大鳥が舞い上がったように優雅で、そして獲物を狙い、一気に襲いかかる魔鳥のように・・・

地に降り立った姿は、冥界の鬼を思わせる。

その足元には、大の字に伸びている者がいた。あの川で見たやつだ。緑の体に甲羅を背負^{しよ}って、頭に皿があるやつ。

「河童？」

その横には童子わらしが立っていた。「さつき覗いていたやつか・・・」
その童子の横に立ち、頭を撫でながら「座敷童子・・・か？」

「なぜ俺を見張る？」

「・・・」 なのにも応えない童子。

何か変だ？妖怪相手にこうまで簡単に威圧出来るなんて？

「うゝん・・・」 河童が目を覚ました。「イテテテ」 頭の皿さすを擦りながら起き上がる。

「わっわっ！よせ、助けてくれ」

「俺は別に何もしない・・・だが、なぜ俺を見張る」

「あんた・・・アニキか？昔のアニキなのか？」

「？お前たち、俺を知っているのか」

「何も覚えてないのかい？アニキ」

「ああ、そのようだ。教えろ、俺は何者だ？」

「やつぱり・・・あいつの目に侵おかされちまったみたいだな」

「あいつ？・・・あいつとは何だ？」

「本当に何にも覚えていないんだなあ、アニキ」

「いや、ひとつだけ、この場所は見覚えがある・・・だから来た・・・
だと思っ」

不安な眼差しで見つめる河童と無表情のままの童子。

「もうすぐ、起きるよ」 童子はぼつりと呟く。

「・・・起きる？」

「あつ、そうなんだよアニキ、百目のやろっだよ」

「百目？・・・」

「アニキはあいつのせいで・・・それで、仲間たちもいつぱい消された」 河童の目が恐怖に慄おのいていた。

「もう、あの爺さん一人じゃ抑えられない・・・アニキ・本当にアニキなら何とかしてくれよ」

哀願する河童と悲しみの表情の童子。

「俺に何ができるんだ？」 困惑を隠しきれない黒衣の男の手を、童

子の手が握っていた。

「思い出さなければ、何も出来ない・・・教えろ、俺の全てを・・・俺の過去を・・・」

「古」の序

「古」の序いにしへ

闇に支配された時代。その時代の餌食となつた民。その民も、時として闇に落ちる事がある。

乱世の世に、逃げ隠れる落ち武者の一行あり。

傷つき、息も絶えどになりながら逃げ込んだ山奥に、寂れた村があった。

傷だらけの一行を、村人たちは、この村の外れにある寺に匿い、傷の手当てや食事の世話まで行つた。

だが、自分たちが生きていくのもやつとの時代に、よそ者を面倒見る余裕があるのだろうか？

ある日の事、届けられた食事を食べた途端、何人か悶絶し倒れ始めた。

食事に毒が盛られた事に気がついたが、時すでに遅し。殆どの者が息絶え、体が痺れ動けなくなつた。ほんの数人だけが何とか動ける状態の中、寺を囲むように人影が現れた。

その人影は、各々おのおのに鎌や鍬、槍などを持った村人たちだつた。

寺の扉を開け、寺を囲む村人を睨む武将。

「おぬしらあー・・・謀りたばかおつたかあー」

刀を振り回し、痺れる体を引きずりながら、村人に迫る。

怯えながらも身構える村人たちも、武将との間合いを少しずつ縮めてくる。

一人の村人が、後ろから槍を突き立てたのを合図に、何人かが襲い掛かったが、武将は倒れず、刀を振り回すのを止めなかった。

「なぜじゃ、なぜじゃ・・・」血まみれになりながら、まだ抵抗する武将。

「お許しくださいませ、あんたらを殺れば、村が救われるんじゃない」
「そうじゃ、そうじゃ、ここの城主様が、あんたらの首を持つてくれば、褒美を下さる。それで村は助かるんじゃない」力いっぱい突いた槍は、武將の目を抉り抜いた。

血が吹き出る片目を抑え「呪ってやる・・・この村が朽ち果てるまで・
・見ているぞ、末代まで死に絶えるまで・・・」そして武將は死んだ。
その後、落ち武者全員の首を刎ね、城主に献上し、村は少し潤った。
晒しものになっていた首には、なぜか片方の目が無くなっていたという。

その後、村には不可解な事が起こり始めるようになった。
夜な、寒々するような視線を感じたり、闇の中に浮かぶ目を見た
りと、村人たちは恐怖した。
そして、いつしか目に何らかの障害を持った子供が生まれるようになった。

だが、それはただの序章にしか過ぎなかった。

ある晩、村に罵声が轟いた。村人どおしが争い始めたのだった。

「オラの目を返せ」

「やめんか、市兵衛」

組み合う村人の一人の手が、相手の目に伸びた。

「ギャー！」おぞましい悲鳴とともに、地をのたうちまわる村人
そして、見下ろす男。その手は血まみれで、何かを握っていた。

不気味な笑いを浮かべる男の目が、ゆっくり開く。そこにはスッポ
リと目が無くなっていた。

「ひっ、ひっ、ひっ・・・」不気味な笑いととも、握られた目を顔
の空洞に押し込み「もっと目がほしい」

辺りを見回しながら、ふらふら歩く男。さっき押し込んだはずの場
所。そこにあるはずの目は、また無くなっていた。

「目をくれ」

老若男女に関わらず、一晩で犠牲者が十数人も出た。残った村の男

たちは、狂気の男を探し回り、居場所を突き止めた。そこは、村外れの森の中にある、あの寺だった。

松明の明りに浮かび上がるその寺の周りで、男たちは震えあがりながらも、少しずつ近づく。

「おつ、おい・・・出てこんかい！」

皆が口々に叫ぶ中、寺の扉が勢いよく開き、そして、両目のない男がニタァー、と笑いながら出て来た。

「目えゝ、俺の目はどこだあゝ」

怯える男たちを、無い目で見渡し「お前らの目もよこせ」と言うなり、男の体が膨れ始め、いつの間にかブヨブヨで黒褐色のしわしわの肉片に変わった。

無数にある皺が、突然、パツクリと裂け、そこに幾つもの目ん玉が男たちを見た。

そして、夜の闇を劈くような悲鳴が、辺り一面に木霊した。

「奇」の惹

「奇」の惹

幾重にも重なる山々のグラデーションは、遠くにいけばいくほど、霞んで空の色と同化していく。

やがて陽光がすべてを朱色に染め、風の道は山肌を伝い、駆け抜けるように木々の間と、けもの道を吹き抜ける。

膝まで伸びた雑草の間に、けもの道がさらに山奥まで伸びていた。シャーン・・・シャーン・・・しやせん 錫杖しやくじやうを突きながらその狭いけもの道を歩く二人の旅の僧がいた。

一言も語らず、ひたすら山道を進んでいる。

いくつもの山を越え、斜面を下り、生い茂る葉の密度が濃い森を抜けた時、田園が広がる一つの村が見えた。

「見えるか？あの妖気」

頭に冠った傘をほんの少しだけ上げ、茶というか、少し赤みがあった瞳が見つめる先にある村を・・・

「いくぞ！」

二人の僧はゆっくりと山を下り、村を抜け、その向こうに広がる森へ向かった。

森に入るなり「念が渦巻いている。人・・・それに、物の怪もののけの念だな、何があったのだ？」

さらに奥へ進むと、日の光すら届かない真つ暗な場所に来た。

古びた注連縄しめなわがかかり、見上げる先は、葉に覆われた一本の太木があった。

その横にもまた、古びた寺がある。

「もどるぞ！」そう言い放ち、踵かかひすを返すようにその場を後にした。

二人の僧は、森を出て村へ向かう。村に入る前に、懐ふしより人型の紙切れを取り出し、村を囲うように人型の紙を置き、空中に手刀で何

やら書きながら呪文を唱えた。

すると、人型の紙がふわりと立ち、両手を広げて大きくなっていた。

それは、大きくなればなるほど、透明になっていき、やがて手を繋いだように横一列に村の入り口を塞ぎ、そして、消えた。

「これでよし」

辺りを見まわし、入口の横に咲く一輪の花を見つけ、そっと近づき、その花を撫でながら話しかけ、そして、村の奥へ消えていった。そこには紫色の桔梗が一輪、首を振っているように、風に吹かれていた。

二人の僧は、村のほぼ中央で火を焚き、さらにその火を中心に、五つの火を起こした。

日も暮れ、満点の星が空を覆う中、家々から村人が顔を出し始めた。

この村に残っている女子供と、老人、それに数人の男衆だった。

僧の一人は火の前に座り、ピクリとも動かない。その横でもう一人の僧が、火にお札を焼くべっている。

その様子を家の中から見ていた村人たちは、一人、また一人と家の中から出てきて、火の周りに集まり始めた。

火の勢いは益々上がり、火の粉が舞い上がり、消えることなく、戦ぐように村の外へ流れていく。それが村の外へ出るなり、何かに吸い込まれるように消えた。

火の粉の僅かな明りに照らされ、村の入り口に浮かび上がる人影が一つ。細身の体に、少し着崩した着物は鮮やかな紫で、その容姿は何とも妖艶さを漂わせている一人の女が、村の外をずっと見ていた。

その足元は、紫の桔梗が咲いていた所だったが、そこには花が無くなっていた。

夜の闇は、益々その黒を濃くしてくる。いつの間にか、火の周りに村人たちが集い、燃え盛る炎と二人の僧に、いつしか縋^{すが}っているように、拜んでいる。

やがて、炎の前に座る僧が目を開き、スッと立ちあがり村の入口へ視線を移した。

入口を見張るように立つ紫の着物の女が、こちらを見ていた。袖の裾で口を隠し、切れ長の目は何かを訴えているようでもある。

「来た！」一言呟き、入口に向かう。

女の横に並び立つと、女は何かを指差した。その細くしなやかな指が差す方向に、瞬きをを繰り返すように近づくと、無数の光点があった。

火の周りで、慄きながらもその様子を見守る村人たち。いったい何が起ころうとしているのか、不安な表情のまま、その場を動けずにいた。

もう一人の僧は、慌てるでもなく、お札を火に焼べるだけで、入口の方すら見ようとしもない。

そして、入口に立つ僧は、何もなかったかのようにこちらに戻ってきた。

「まだ、大丈夫だ。ここには入ってこれぬ」

そしてまた、火の前に座り、目を閉じた。そして、そのあと何事も起こらず、夜が明けた。

翌朝、二人の僧は、この村の長老の屋敷に居た。

「あなた様方は、どちらから参られた御高僧様でいらっしゃいますか？」背が丸まった長老が問う。

頭を綺麗に剃り、擦り切れだらけの僧衣を纏った初老の僧と、同じく擦り切れた真黒い僧衣に、ぼさぼさに伸びた髪の若い僧が、長老の前に座っていた。

「私どもは単なる旅の僧でございます。たまたまこの村に立ち寄った際、邪念を感じ、寄っただけの事。お困りのご様子・・・訳をお聞

かせ下さらぬか？」

「・・・」ちよつと困つた様子の長老。

「その前に、私めは源徳と申す。そして、こいつは私の弟子だが、名はまだ持つてはおりませぬ。一つ目と呼んでおります」

「源徳様と・・・一つ目？・・・様」

「ではいったい何が起こつているのでしょうか？」

長老は、一つ目と呼ばれた僧を、怪訝の表情で見た。ばさばさの前髪は顔半分を隠し、隠れていない方の目は、どこか遠くを見ているような眼差しで、その瞳は何と大きい事か・・・そして、何とも真黒な事か。

少し間をおき、長老はこの村で起きた事を話し始めた。

話を聞き終えた源徳は「大体の事はわかり申した、して、その武将の名は聞いてはおらぬのですな？」

「はあ、それが、詳しく語らぬので・・・すぐこの地を離れると申しておりましたゆえ、聞くに聞けず・・・」

「しかし、何と惨い事を・・・して、その武将の袂えぐられた目は、どこにも無かつたのですな？」

「へい、死体はすべて集めて、城主様の元へ・・・ただ一つを・・・除き」

長老の屋敷を後に、源徳と一つ目は村の入り口に立っていた。その足元には、紫の桔梗が一輪咲いていた。

二人は村を出て、森へ向かい歩き始めた。

森の中は、昼だというのに薄暗く、とてもヒンヤリしていた。

さらに、森の奥へ進み入り、あの寺の前まで来た。源徳は、辺りを見回し、寺の横の大木に目を止めた。

「この御神木か？・・・」

源徳は、御神木に近づき、何やら思案している。

「一つ目・・・儂は暫くここにおる。お前はこの森を見て回るんじや。」

だが、暗くなる前に村へ戻れ。やつはまだ寝ておるが、暗くなれば目を覚ます・・よいな！」

そう言われ、一つ目は森のさらに奥へ消えていった。

森を詮索し、さらに奥へと足を踏み入ると、ちよろちよると流れる小川を見つけた。その上流を目指しさらに歩いて行くと、水に反射する日の光が、煌めいて眩しい沼に出た。

沼に近づき、暫く眺めていると、風もないのに、水面が波立ち始め、水面に大小の顔が浮かび上がった。

頭の上に皿らしきものを乗せた緑の顔の者たち。

その沼に浮き上がってきた者たちは「河童」だった。何匹も浮かび上がる河童！その中の一匹が胸まで浮かび上がり「お前・・怖くないのか！変なやつじゃな！」「ふん、早く帰れ！ここはお前たちが来るところではないぞ！帰らなければお前の肝を抜くぞ！」

「・・・」一つ目はただ河童たちを見ているだけで、何も答えない。「聞こえんのか？」

だが一つ目はそんな河童たちを無視するように、沼の淵を歩きだし、とつと森のさらに奥へ歩いて行ってしまった。

「な・なんじゃ・・無視か？変な人間じゃ」そう言いながら、皆が沼の中へ消えて行く中、一匹の子河童だけ、歩き去っていく人間を見ていた。

「妖」の侵

「妖」の侵

茂みの中を、そつと跡をつける子河童がいた。

それを知ってか知るまいか、一つ目は気にすることなく森の中を歩いている。

ガサ！何かが草むらの中を動いた。すると、草むらから童子^{わらし}が顔を出し、一つ目をじつと見ている。

一つ目が童子に近づいていくが、童子は逃げようとせず、その場で一つ目を待っているようだった。そんな童子に近づき、そつと頭を撫で始めた。

そんな二人を遠目で見ていた子河童は、何か腑に落ちない感じを受け、茂みの中を、二人にそつと近づいてみた。

一つ目と童子は、手を繋ぎ、森の中をまた歩き出した。

「ありやりや？座敷童子じゃねえか。あの二人・・・あの人間って、もしかして・・・」

しばらく様子を見てみると、草むらのあちこちから、たぬきやきつね等の小動物や鳥たちがいつの間にか集まっていた。

「おい！・・・お前って何もんだ？」子河童は草むらから飛び出し、二人へ近づいた。

振り返り、子河童を見る一つ目と童子。

「お前って、もしかして・・・（ゴオー・・・ゴオー）様」吹き抜ける風の音が声を掻き消した。

「なあなあ、そうなんだろ？・・・おい、座敷童子、そうなのか？」

童子はただ河童を見ているだけで何も答えない。

黒衣の僧、一つ目は前を見たまま「お前、何か見たか？」威圧感のある声で河童に問う。

「あつ・・・ああ、凄い怨念だった。その怨念が跳んできて、やつ

が怨念を食った」

「そうか！」一言いって、河童の皿を撫でた。すると河童は、恍惚の表情になり、その場でフニャフニャと座り込んでしまった。

一つ目は、童子の手を離し、今来た道を帰り始めてしまった。

日暮れ前、源徳と一つ目は村に戻り、昨晚のように火を焚き、同じように村の結界を強め始めた。だが、その晩は何も起こらず朝が来た。

そして、昨日のように一つ目は森にいた。

その横には、童子と子河童が付き纏まとっている。相変わらず童子は、一つ目と手を繋ぎ、河童は一生懸命、一つ目に話しかけている。

「なあなあ、アニキよ」昨日の今日で、もう馴れ馴れしくしている河童。

「アニキはどこから来たんだい」

「わからん．．どこから来て、どこに行くのか？．．」

「ふゝん！そうか．．なあ、アニキのその力って、いつ覚えたんだい」

そう聞かれた一つ目の手の平の上で、人型をした紙がピョンピョンと跳ねまわっていた。

「この力．．いつから？」

（．．．？妖気）目の前の木に何かが染み浮き上がっている。

「アッ．．アニキ、これは．．」

その染みは、人の形をしていた。顔らしき部分．．その表情は、恐怖の表情をしていた。

さらに周りの木を見回してみると、どの木にも同じような染みがある。

「アニキ、これは人だぜ．．ここの村人じゃねえのか？」

「そのようだ、皆．．目が無い．．生気を吸い取られて、木にされたんだ」

「．．．！？アニキ．．あれ．．木霊こだまだぜ！」

何本かの木に、白い小さな染みが浮かび上がっていた。小さい人型の染み。

「木霊まで・・・なんて事を・・・」

その時、童子が一つ目の袖を引いた。

「どうした？」

童子はさらに袖を引っ張り、森の奥を指差した。

「何かあるのか？」

童子は首を縦に振る。

「あっちは・・・オイラの沼の方じゃねえか」河童は、童子が指さす方を見て言った。

一つ目と河童と座敷童子は、沼へ急いだ。そしてそこで見た物は・干乾びた河童たちの死骸だった。

「とっ・・・とうちゃくん！・・・」子河童が一体の干乾びた河童に駆け寄った。

沼には数体の干乾びた河童が浮いている。

「なぜ・・・やつは人だけじゃなく、妖怪こいつたちまで・・・やつは鬼か？」

「とうちゃくん！」泣き叫ぶ子河童を見ながら、一つ目は呟いた「鬼退治！・・・か？」

心配そうな顔をしている童子の頭を撫で、一つ目は森の奥へ消えていった。

「古」の真

いにしえ　ことわり
「古」の真

踏みしめる土の弾力は、関節への衝撃を和らげるほど水分を含み、異常なほど纏わり付く湿気は、空間が揺らめき、己の精神を空虚に陥らせてしまうほど、次元を超えたような錯覚に陥らせる。

異空間に迷い込んだようなこの場所は、行き場を遮る壁のように鎮座する御神木と、妖気渦巻く古寺が、魂の闇を目覚めさせようと待ち構えるようにも見える。

しばらく動かぬ一つ目に、跡を追ってきた童子と子河童が寄ってくる。

「くるな！」突然、一つ目が一喝した。

童子と子河童は、その一喝がもの凄く緊迫感を含んだものだったため、その場で硬直したように動けなくなった。

「お前たちは帰れ！ここには来るな」

「でもアニキ・おいら」

「お前たちも、ああなりたいのか？」と指差す先に、今まさに小さい木霊が、木に吸い込まれようとしていた。

「アニキ・あいつだ。あいつがとうちゃんたちを・・・」

河童が指差す先に、黒い塊が蠢いていた。

「お前たちは早く下がれ」

ブヨブヨとした蠢く塊が、こちらに気づいたらしく、ズルズルと迫り始めた。そして立ち止り、膨れ上がるように大きくなり始めた。「人間・・・それに物の怪けか？」ゴモゴモと何かを粗食しながらしゃべるようなそれは、何とも耳障りな声だった。

「なぜ、ここに住む森の主たちまで襲う」

「はて？まるで人間は襲われてもいいが、物の怪どもが襲われるのは、気に入らないようだな」

顔の二つの目が欄欄と輝いた。

「確かに、人は憎まれても仕方ない生き物・だが、こいつらは何もしていない、この森を守っているのに、なぜだ？」

「知りたいか？だが、知ったところでお前には何も出来ぬぞ」

「百目・きさまは、本当に百目か？」

「なに？儂を知っているようなものの言いよう。お前は何者じゃ」

「・・・」

「なぜ答えぬ！お前・ただの人間ではないな？」

「・・・違うか？・きさまはあの百目ではないな」

「何を訳のわからん事を・まあよい、お前のその目も頂くとするか」

百目の体中にある皺という皺が開き、そこに見開かれた目が現れた。

「さあ、どうじゃ、儂の目を見た以上、お前は儂のいいなりじゃ、さあ、その目を貰うぞ」

「・・・」

「どうした、早く目を寄こさんか」

「残念だな、きさまの術は俺には効かん」

「なつ、なぜじゃ・お前はいつたい・・・」

「教えてやろう、俺には、人の目などというものが無いからな」

「なに？・ならばお前のその目は、なんじゃ」

「作りものよう、本当の目はこっち」顔半分にかかる髪を掻き分けると、そこには、黒目の無い目玉が、じつと百目を見ているようだった。

「その昔、きさまら百目の一族に、目を奪われ、命も取られようと

した。だが、俺は生きていた」

「なんじゃと！お前はいつたい・・・」

「きさまら一族の中にも邪な奴がいる。お前のようにな・・・掟を捨て、人の目を喰らい、一族すら平気で裏切る輩がな」「だがな、すべてが悪ではなかった。俺は、百目に殺されかけ、百目に救われたんだ」

「おお、思い出したぞ、我が一族に謀反を企てた一派がおった。ならばお前はその時の・・・」「だが、俺はその時、ただの傍観者だった。醜い争いなどしたくなかったからな・・・あれ以来、一族はほとんど姿を消した。いや、消された」

「そうだ、お前たちの長おみによつてな」

「・・・お前、あの方を知っているのか？」

「言つただろう、俺は百目に救われたと・・・」

「まさか、お前を助けたのは・・・」

「そんな事はどうでもいい、俺はお前を倒すだけ」

すると、一つ目の片方の目が、急に充血したように真っ赤になった。

「おお、その真っ赤な目は・・・うれしいぞ、力を持った目じゃ」
全身を震わせ、何かを捕まえようと、手を伸ばし、ゆっくりと一つ目に近づいてくる百目。

それを、草むらの奥から見ていた河童と座敷童子。

「やや、アニキがやられちまう・・・どうすつぺ」と頭の皿をペンペン叩いて考える河童。「そうだ、後ろから、オイラの水鉄砲をお見舞いしてくれる」と河童は、屈みながら、百目の後ろに回り込もうとした。

「いったらだめだあ、オイラたちじゃなんもできね」と座敷童子は河童を止めた。

「お前はここにおれ、オイラが一人でやつつけてやる」と4手足をバタつかせながら、草むらを移動していった。

そんな河童を見ていた座敷童子は「はあく・・バカたれだあくあいつは・・体中に目がある百目さんの後ろにいつても、見えてるのに・・」

迫りくる百目に対し、一つ目はジリジリと後退していくが、表情は余裕そのものだった。

さらに後退を続ける一つ目の片足が、木漏れ日の境に達した時、そこでピタリと動きを止めた。

「さあ、観念してその目を儼によこせ」なおも近づく百目。

あと数歩のところまで近づいた時、一つ目は、後ろに跳躍し、懐から何か取り出した。

そして、着地と同時に、眩い光が百目を照らす。

「ギヤアー・・」百目の体中の目は一斉に閉じられ、苦しみながら後ずさって行く。

光の中に立つ一つ目の手には、一枚の鏡が握られていた。

「お前は目が多すぎる、だから光に弱いんだよな」

苦しみもかく百目の姿を、草むらから見ていた河童は、ここぞとばかりに飛びだし、勢いよく口から水を吹き付けた、が・・百目はそれを難なく交わし、背中から目玉を発射させ、河童を吹き飛ばしてしまった。

「ばか！」と叫び、一つ目は河童に疾走した。

起き上がるうとする河童に、百目は二発目の目玉を発射した。

「わあっ！」と叫び、両目を瞑り身構えた河童。しかし、何も起らない。片目をゆっくり開けると、一つ目が河童を庇っていた。

「あつ、アニキ・・・」

「バカ野郎・・・大丈夫か？」

その時、一つ目は敵に後ろを見せていた。

急ぎ振り返るも、時すでに遅し、百目の目玉が背中に食い込み、一つ目の体内へほとんど吸い込まれて行くところだった。

棒立ちのままの一つ目の背中を見つめ河童。

その時、河童の目の前に何かポトリと落ちた。それは、作り物の目玉だった。

「アニキ？」

ゆっくり振り返る一つ目・・・その片方の目がすっぽりと抜け落ちていた。

突然、一つ目が河童の首を掴み、締め上げた。

「アッ・・・アニ・・・キッ・・・苦しい・・・」

河童を締め上げる手に、さらに力が加わっていく。その刹那、草むらから小さい影が飛び出し、一つ目の手に飛び付いた。それは今まで隠れていた座敷童子だった。

「やめて、やめてよ・・・目を覚まして・・・悲痛な呼びかけに、一つ目の手が河童を離れた。

「ゴホ、ゴホッ！」せき込む河童を庇う童子。

そんな姿を見ていた一つ目は、一歩、また一歩と後ずさりしていった。

『ううわあ・・・！』突然、叫び始め、頭を抱え出す一つ目。

「ほれほれ、無理をするな・・・もうお前は儂の思うがままじゃ」と、うしろから百目が言い放った。

唸りながら苦しむ一つ目が、その動きを止めた時、抜け落ちた目の後に、新たな目が現れた。

「丁度いい、まずは、その2匹を儂の処に連れてこい」
「そう命令され、河童と童子に手を伸ばす」一つ目」の目は、まさに、死人の目のように濁っていた。

その時、もう片方の赤い目が、急に反転したかと思った時、そこに瞳が現れた。その瞳は、金色の瞳だった。

踵を返し、百目を睨むその瞳。その目を見た百目は一瞬、驚嘆した様子だったが、すぐさま肩を震わし、笑い始めた。

「わっはっはっ・・・その瞳・・一族の長の目・・その目の力が欲しいぞー」

「・・・」

「お前にはその目は、扱いきれんじやろう、ならば、この儂が使つてやる。そうすれば、この国は、儂の物だあー」

「ハア、ハア・・お前たちの長が言っていた・・」闇は掟、光は定め、闇と光は相容れぬ、ならば掟に従い闇に仕えよ”とな・・お前も掟を捨てるのか・・」

「ハッハッハ！そんな戯言、誰も聞かぬわあー、早く儂の物になれー」百目の大きい二つの目が、血のように真っ赤に光だした。

その光を受けた一つ目は、また苦しみだし、自ら己の顔に爪を立て、掻き毟っていた。

『ウギヤアアー！』顔半分を引つ掻き、血だらけになりながら、何かと闘っているようだった。

しばらくして、一つ目の両手がスッーと落ち、おとなしくなった。
「あつ、アニキ・・」

動かなくなった一つ目に、河童が声をかけた。

ゆっくり振り返る一つ目。

『ガアアアアー！』目の前にいる一つ目の唸りと、鬼のような表情に、河童と童子は恐れ慄き、へたり込んでしまった。

一つ目は、絡みつく布を引きちぎらんと全身に力を入れ始めた。

今まで能面のように無表情の女の顔が、急に苦痛の表情に変わる。
”ミシミシ・・”と布が音を上げ始め、今にも裂けそうになり始めた。

いったい、この人間とは思えぬ力はどこから？

”バリバリ”と、巻き付いていた着物の袖が、一気に裂け、女は吹き飛ばされてしまった。

だが、そこにはもう、女の姿は無く、一輪の花が真つ二つになり、転がっていた。そして、一枚の花弁が、舞い落ちた。

逃げる河童と童子を追う一つ目に、突然、一羽の鳥が体当たりして、注意を逸らした。それは、ぶつかると同時に、煙のように消え、一枚の紙切れになり、ヒラヒラと落ちた。

その時、どこからか、4足が空中を掻き分けるように、一頭の獣が駆け寄り、一つ目と百目の間に、降り立ち「ガールルウー！」と百目を威嚇し始めた。

「んん？・・式神獣・・」

少し遅れて、男が一つ目に駆け寄ってきた。

「一つ目・・勝手な事を・・？おつ、おい」 「・・遅かったか・・」

その男・・源徳は、一つ目の状態を見るなり、懷より一枚の札を出し、一つ目の額に張り付けた。すると、一つ目は、その場に崩れるようにへたり込み、動けなくなっていた。

威嚇されている百目は、その場を動けないまま「儂の邪魔をするお前は、何者じゃ？」と凄みを利かせた。

「・・・百目・・・またも非道を繰り返すか」

「なんじゃと・・・」

「もう、その御神木に封じ込める事は出来ぬか、ならば、仕方あるまい・・・『焰鬼』よ・・・」

「？なぜ、儂の名を・・・おお、思いだした、お前は、あの時のクソ坊主」

「残念だ、お前を浄化するはずの御神木が、逆にお前に力を与えてしまうとは・・・あの武士の怨念が、これほどとは・・・怨念の詰まった武士の目を喰らい、甦ったのであろう」

「おお、その通りじゃ、奴の怨念は、まさに鬼神・・・あれほど澱んだ魂は初めてじゃ、嬉しくなったぞ」

「・・・」

「さあ、どうする、儂はもう、あの時の儂ではないぞ」

「そのようだな、だが・・・お前の力の一部は、今どこにある」

「なっ、なんじゃと」

「傀儡眼・・・一つ目を操る為に放った物だよ」

「くうー！」どうやら図星らし。動揺を隠せぬ百目は、念を送り、一つ目から目を戻そうと試みたが、一つ目の体がただ震えるだけで、目は戻る事はなかった。

「無駄だ、一つ目の体ごと封じた。それに、傀儡眼には、相手の力量に合わせ、力を注入する為、お前自身の力も分けなければならぬからな」

「雷鷲丸下がつておれ！」威嚇をしていた獣を下がらせ、懷より、数枚の札を出した。

「さて、焰鬼よ、この戦いで最期じゃ。一つ目がこの状態では、儂一人でやれねばならぬ」数枚の札から一枚抜き、手刀で、何やら書き始めた。

その行為を見ていた百目は「今のお前では、この儂は倒せぬ・・・」

今、不動金縛りの術で儂の動きを封じようとしているようだが、無理じゃぞ」

「さて、どうだか？『焰鬼』の名によって、すでに縛られておるぞ」
「名は、一種の術。このくされ坊主の”まやかし術”が、退魔術そのものじゃからな」

源徳は、両手を組み合わせ「ノウマクサンマンド・バサラダンセン・ダマカラシャダソワタヤ・ウンタラタカンマン」と唱え、両手を組み換え、剣印を結び「オン・キリキリ」さらに刀印にし「オン・キリキリ」と真言を唱えた。そして、次の印を結ぼうとした時、いきなり後ろから誰かに羽交い絞めされてしまった。それは、今までそこに倒れていた一つ目だった。

「ホーツホツホツ・・・その者、確かに妖術使いとして、その力を認めるしかない。だが、慈悲の魂（こゝろ）に染まり過ぎておる。闇の力の前に、その魂があつてはならぬはず・・・未熟ものゆえ、儂は力を多く送っておった。故に、そいつは操りやすいのじゃ」

「くつ、見くびったか・・・」羽交い絞めされ、動けぬ源徳。
「雷鴛丸・・・儂ごと雷撃を打て・・・」

一瞬戸惑いながら、式神獣の雷鴛丸が低く唸り、二本の尻尾を擦り合わせた。すると、体中に青白い火花が走り、帯電し始めた。

次第に体中の放電が大きくなり、二本の角より眩い閃光と共に、稲妻が発せられた。

感電した二人の体を、青白い光が走り抜け、一つ目だけが弾き飛ばされた。

体中から煙が上がる源徳は、苦しみながらも一つ目を抱え上げ、御神木へ向かった。

また、一つ目に力を分け与えていた百目も、少なからず雷撃の影響

を受け、しばらく動けなくなっていた。

御神木の根元に、人一人が入れそうな穴があり、源徳はそこに、お札を一枚投げ入れた。

「うつ・うつくん、源・徳様・」

「気が付いたか・一つ目よ、儂は今からお前を、黄泉の国へ送らねばならぬ、百目の力が、お前の中にあるが故、送らなくてはならぬのじゃ、許せ・」

「わかつております・源徳様は・どうなされるつもりで・」
「もう百目は倒せん、だがな、儂の体に奴を封じ、抑え込む事は出来る」

「源徳様・それでは、生きる屍となり、苦痛の中に身を置くという事でわらないですか」

「これでいいのじゃ、あの時儂に力が無かったばかりに、奴を完全に封じる事が出来なかった報いよ」

「許せ、一つ目・運が良ければ現世に戻るやもしれぬ」言い終えると、一つ目を穴の中に押入れ、そのまま突き放した。風の轟音と共に、一つ目の体は、穴の闇の中に、吸い込まれて行った。

その途端、百目の体が少し、萎み始めた。

「よくもやりおったな、だが、これしきの事で、この儂は倒せぬぞ」
「わかつておる、今からお前を、儂の中に封じ、共に無となろうぞ」
「なんじゃと・狂ったか？」

源徳は、二つに切れた一輪の花に向かい「済まぬな、紫よ・」と呟くように言い、そして、横に仕える雷鷲丸の頭を撫でながら「よいか、一つ目がもし、この世に戻れたら、奴を助けてやれ」そう言い残し、急ぎ、不動金縛りの術を唱え、体に数枚の札を貼り、一枚だけ札を口の中に入れ、それを飲み込んだ。

動けぬ百目を前に、一枚の札を取り出し、それを頭上に掲げると、お札がみるみる広がり、一枚の大きなお札になった。それを百目に貼り、その前で九字を切り、呪文を唱えながら一気に剥ぎ取ると、百目は苦しみだし、霧となり、源徳の口の中へ吸い込まれて行った。

源徳の肌という肌には、異常なほど血管が浮き出し、苦悶の表情のまま、一歩々目の前の寺に歩いて行き、息絶え絶えになりながらも、窓という窓と扉に札を貼り、一人その中へ消えて行った。

真つ暗な境内の中、朽ち果てかけた仏像の前に座り、何も見えぬ中で、「一つ目よ・・もし、あのお方がお前を見つけて下されば、現世に戻るやもしれぬ・・気まぐれなお方だが、お前のその魂、きつと戻して下さるはずじゃ・・その時が来れば、儂の役目も終り、きつと成仏出来るであらう・・待っておるぞ、一つ目よ！」そう言い終えると、死んだように動かなくなった。

霧の中を漂う一つ目。上下の感覚がわからぬそこは、落ちて行くのか、昇って行くのか全くわからず、そのうちに意識がどんどん薄れて行く中、ぼんやりと人影が、近づいて来たように見えたが、そのまま意識が飛んで行ってしまった。

人影は、一つ目に近づき、見つめていた。

さらに、その人影の向こうから、何やら大きな黒い影が”ギシギシ”と音を発てて近づいて来るところだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7348h/>

式神王 ～ 百目の瞳 ～

2010年10月10日02時19分発行